HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学大学院歯学研究科・歯学部におけるFD活動
Author(s)	八若, 保孝; 加我, 正行; 飯塚, 正 他
Citation	高等教育ジャーナル : 高等教育と生涯学習, 16, 153-159
Issue Date	2008-12
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.16.153
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38796
Type	departmental bulletin paper
File Information	No1613.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部における FD 活動

八若　保孝*, 加我　正行, 飯塚　　正, 山本　恒之, 佐藤　嘉晃,
根岸　　淳, 北川　善政, 鈴木　邦明, 森田　　学, 吉田　重光
（北海道大学大学院歯学研究科 FD 委員会）

北海道大学大学院歯学研究科

Faculty Development in Graduate School of Dental Medicine and School of Dental Medicine, Hokkaido University

Yasutaka Yawaka**, Masayuki Kaga, Tadashi Iizuka, Tsuneyuki Yamamoto, Yoshiaki Sato, Jun Negishi, Yoshimasa Kitagawa, Kuniaki Suzuki, Manabu Morita and Shigemitsu Yoshida
(Committee of Faculty Development in Graduate School of Dental Medicine, Hokkaido University)

Graduate School of Dental Medicine, Hokkaido University

Abstract — Activities of Faculty Development (FD) in the Graduate School of Dental Medicine and School of Dental Medicine of Hokkaido University consist of lectures on FD, workshops on FD and student evaluation of undergraduate lectures. Basically, the lectures on FD are held 4 times every year. The speakers are selected not only from the faculty of Hokkaido University but also from outside the university. A workshop on FD is held once every year. Usually about 30 faculty members of the Graduate School of Dental Medicine participate in the workshop that takes place for two days in a hotel out of campus. The student evaluation of undergraduate lectures is conducted twice every year; i.e., for the lectures in the first semester and the second semester. The lectures and workshop on FD began in 2000, and the student evaluation of undergraduate lectures began in 1997. Many faculty members have participated in the lectures and workshops on FD and made efforts to develop their competence. The student evaluation of undergraduate lectures showed a gain in the score. However, there are a few faculty members who have a negative view of FD in practice.

(Received on 1 February, 2008)

*) 連絡先：060-8586 札幌市北区北 13 条西 7 丁目　北海道大学大学院歯学研究科

**) Correspondence: Graduate School of Dental Medicine, Hokkaido University, North13 West7, Kita-ku, Sapporo 060-8586, Japan

1. はじめに

医学の発展・進歩に伴い，各疾患に対する医療がより高度になり，疾患の治癒率向上が報告されてきている。しかし十数年前の医療現場では，“疾患は診ることができるが，患者を診ることができない医療人”の存在が徐々に問題になってきていた。それを受けて，国（文部科学省および厚生労働省）は，医師，歯科医師など医療に携わる職種のより良い人間性の向上をはかることを，各大学の医学部・歯学部などに指導し，改善を求めた。北海道大学大学院歯学研究科・歯学部では，学部教育において，2年時後期から4年次前期までの2年間，「全人教育演習」を金曜の4時限に設け，ゼミ形式で3~4名の学生と1名の教員（教授，助教授（准教授），講師）がディスカッションを行ない，学生の人間性向上の一助としてきた。しかし，講義・実習を通して学生と向き合う我々歯学研究科・歯学部の教員自体は，教育の専門家ではなく，教育に関する必要な知識・技能が絶対的に不足していることが懸案事項に登るようになり，学生教育能力の資質向上が必要であることが明らかになってきた。このような背景において，平成9~10年に行なわれた北海道大学高等機能開発総合センター主催のFDワークショップに参加した教員から，同様のFDが，歯学研究科・歯学部教員に必要であることが上程され，FD活動の準備が始まった。

北海道大学大学院歯学研究科・歯学部にFD（Faculty Development）委員会が正式に誕生したのは，平成11年の7月である。FD委員会は，教務委員会とは別の組織として独立して，主に教員の教育に関する資質向上を目的とした活動を企画・支援する存在と位置付けられた。そして，FD委員会の主な活動は，

① FD講演会
② FDワークショップ
③ 学生による授業評価の実施

となった。委員会の構成員は，各教室から1名選出とはせず，FD活動に興味を示し，率先してその活動に携わる教員有志から構成された。はじめの構成は，教授3名，助教授2名，講師2名，助手2名の合計9名であった。

2. 実施状況と成果

2.1 FD講演会

歯学研究科・歯学部では，平成12年4月から，年4回を基本にFD講演会を行なっており，講師の都合や学会等の関係で一部回数が減少した年度も存在したが，おおむね良好に講演会は開催されている。歯学研究科の教員は，出席をとることも要因になってはいるが，都合がつく限りこの講演会に参加し，自分自身の資質向上の情報収集に活用しており，毎年行なっているが，モチベーションは下がっていない。内容についても，北海道大学関係者に留まることなく，広く講師を選抜しており，異職種の講師の皆様の講演内容が，歯学研究科の教職員の知識，意識，行動などにおけるスキルアップに生かされていると考えられる。今後も，現行維持を基本にFD講演会の開催を計画している。

これまでのFD講演会の詳細を表1に示す。

2.2 FDワークショップ

FDワークショップは，平成12年から，年1回，8月下旬から9月上旬にかけて，奈井江町で1泊2日の日程で開催している。平成12年に高等教育機能開発総合センターの援助を仰いで第1回が開催され，そのノウハウを受け継ぐ形で第2回以降は，歯学研究科の教員のみで企画から実施，評価までを行なっている。FD委員会が中心になって行なっているが，タスクフォースについては，FDワークショップ経験者から広く募集することで，教員へのFDワークショップの浸透も意図している。参加人数は，30人前後でほぼ一定している。参加の動機については，各種あるものの，概ね各教室からの命令によるものが多い。しかし，1泊2日で行なわれるワークショップにおける毎年のプロダクツは，比較的良質なものが多い。今年度で8回目となるFDワークショップで，歯学研究科の教員のほぼ全員が，このワークショップを1度は経験したことになり，KJ法，方略などの特別な語句も研究科として理解されるよう

表 1．FD 講演会 (開催場所 : 歯学部講堂)

回	講師	演題	開催日	参加者数
1	吉田重光 歯学研究科 FD 委員長	Faculty Development とは何か？	H12. 4.28.	102
2	大塚吉兵衛 日本大学歯学部教授	本学部における新カリキュラム導入の背景	H12. 7.14.	102
3	織田揮準 三重大学教育学部教授	大福帳を使った授業改善	H12.10.27.	69
4	俣木志朗 東京医科歯科大学大学院教授	歯科医療行動科学入門	H13. 2. 2.	106
5	濱田康行 北海道大学大学院経済学研究科教授	アメリカ・ヨーロッパのビジネススクールの教育	H13. 4.27.	87
6	西野瑞穂 徳島大学歯学部教授	教育組織の実践強化法は？	H13. 7.27.	78
7	中村研一 北海道大学大学院法学研究科教授	国立大学等の直面する変化と対応	H13.10.26	95
8	山岸みどり 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授	人を育てる評価の可能性を探る	H14. 1.25.	95
9	松田浩一 北海道医療大学歯学部教授	北海道医療大学における大学改革の現状と展望	H14. 4.26.	92
10	高橋 保 北海道大学触媒科学研究センター教授	博士研究員を中心とした研究拠点形成における教官の苦労とその実例	H14. 7. 26.	87
11	下野正基 東京歯科大学学監・教授	東京歯科大学における歯学教育改善の試み	H14.10.25	86
12	中村研一 北海道大学大学院法学研究科教授	国立大学等の直面する変化と対応 PartII	H15. 1.24.	97
13	戸塚靖則 北海道大学大学院歯学研究科長 川崎貴生 北海道大学歯学部附属病院長	独立行政法人化・附属病院統合をむかえて	H15. 5. 2.	97
14	高橋 浩 北海道大学創成科学研究機構研究企画室長	知の創造から知の活用へ ―知的財産に関する意見交換―	H15. 7.25.	102
15	山崎 和 北海道大学歯学部 1 期生	「この様な歯科教育であれば」 ―最古参卒業生の目で―	H15.10.24.	75
16	藤澤雅子 小樽歯科衛生士専門学校主任専任教員	歯学教育が変われば歯科医師は変わる ―歯科診療室に歯科衛生士は必要ですか？	H16. 1.23.	80
17	石川博之 福岡歯科大学教授	北大から福歯大に移って	H16. 4.23.	96
18	鈴木 誠 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授	今、高等学校と大学の接点で何が起きているのか？―近づく 2006 年問題と変質する高校教育周辺―	H16. 7.23.	90
19	松田 彰 北海道大学大学院薬学研究科教授	産学連携の問題点　―私の経験から―	H16.11. 5.	82
20	平田創一郎 厚生労働省医政局歯科保健課歯科医師臨床研修専門官	歯学医師臨床研修制度必修化にむけて	H17. 1.21.	110

表 1．FD 講演会 (開催場所 : 歯学部講堂) （続き）

回	講師	演題	開催日	参加者数
21	五十嵐義明 筑波大学財務部長	法人化された旧国立大学の会計・経理について	H17. 7.29.	90
22	戸塚靖則 北海道大学大学院歯学研究科長	歯学研究科を取り巻く現状と課題	H18. 4.20.	131
23	田村新吾 前ソニー株式会社、北海道大学客員教授	人財育成噺 ―自己を “Pro・duce” する	H18. 7.14.	68
24	大畑 昇 学生相談室長 (ハラスメント相談員会議議長)	セクシュアル & アカデミック・ハラスメントの概要と対策	H18.10.13.	82
25	貫田桂一 ホテルクラビーサッポロ料理長	ほめて鍛えるひとづくり ―地域と人を育成し北海道に客を呼ぶ―	H19. 1.25.	89
26	川浪雅光 北海道大学大学院歯学研究科長	歯学研究科・歯学部の現状と課題にとりくむ姿勢について	H19. 4.27.	104
27	青木 敏 (株)DES 歯学教育スクール 代表取締役 松野浩宜　同 講師	100 回国家試験の分析を基にした 101 回国家試験対策	H19. 7.27.	75
1*	逸見勝亮 北海道大学副学長・理事	僕と歯医者さん　―葦の随から歯を語る―	H19. 5.15.	95
2*	浅香 正博 病院長 鋳山 賢一 病院財務担当理事 松浦 亨 病院長補佐	北海道大学病院の現状と課題について	H19. 7.23.	111

・講師の役職はその当時のもの
・1*，2* : 臨時開催第 1 回，臨時開催第 2 回

表 2．FD ワークショップ (開催場所 : 奈井江町 ないえ温泉ホテル北乃湯)

回	テーマ	開催日	参加者数
1	北海道大学歯学部・歯学研究科の再生	H12. 9.9.~10.	39
2	触れてはいけない？教官評価	H13. 9.1.~ 2.	37
3	独創的なカリキュラムを作ろう！	H14. 8.31.~9. 1.	36
4	総合教育期のカリキュラム・デザイン	H15. 8.30.~31.	35
5	世界一魅力的な研修医プログラムを作ろう！	H16. 8.28.~29.	36
6	最終学年に行う統合講義の名にふさわしいカリキュラムを構築しよう！	H17. 9. 1.~ 2.	35
7	こんな閉塞感の中だからこそ、教員のモチベーションをあげる 方略を練ろう！	H18. 8.24.~25.	28
8	来年からこのまま使います！統合講義カリキュラム	H19. 9. 6.~ 7.	30

になってきている。

また，8回のFDワークショップのプロダクツのうち，実際に歯学研究科・歯学部の活動に採用されたものもあり，ワークショップが宿泊施設内での仮想現実ではないことが証明されている。

今後も，歯学研究科・歯学部の改善に必要なテーマを掲げ，年1回のFDワークショップの実施する予定である。

これまでのFDワークショップの詳細を表2に示す。

2.3 学生による授業評価

平成9年から，毎年2回（前期分と後期分）の学生による授業評価を継続している。対象は，学部専門教育に関する講義（2~4年次）である。学生による授業評価は，FD活動より前に開始された。開始からしばらくは教務委員会がその実施を担当していたが，FD活動の開始に伴い，平成12年からFD委員会がその業務を引き継いで担当している。また，上記の講義に対する授業評価のほかに，平成13年から，6年次の学生による臨床系各科の臨床実習に対する評価も実施するようになった。

この授業評価により，多くの教員は，自分の授業（講義）を客観的に見直す良い機会と受け入れ，次の年の授業に反映させている。よって結果として，学生による授業評価が上昇を示す教員が多く，学生からも，「講義が理解しやすくなった」，「講義毎に配布されるプリントが充実してきて，復習などに役立つ」などの意見が多数寄せられている。

2.4 FD委員会

月1回の委員会を基本に，FDワークショップの企画・準備時には，複数回の委員会を設け，1年間の主な仕事（FD講演会，FDワークショップ，授業評価）を行なっている。また，FDワークショップで得られたプロダクツを歯学研究科・歯学部で実際に応用するためのアドバンス的なワークショップも，ワークショップ参加者の有志を含めて，必要に応じて行なっている。

FD委員会の委員は，FDを含めた各自の努力により，昇格（他大学への昇格も含む）や優れた評価を手に入れている。現在の構成は，教授3名，助教授4名，講師1名の合計8名である。

3. 問題点

3.1 FD講演会

問題点として，講師の人選と講演内容のすり合わせがある。FD講演会としてふさわしい人物であり，さらに歯学研究科の教員にFDに関した重要な情報を発信できる講演内容であるために，いつも苦労が絶えない。そして，講師のスケジュール調整にも制限が加わっていることである。具体的には，金銭的な点から，毎回大学外の先生をお呼びすることができないなどである。これらの問題点は，企画する側であるFD委員会のものである。その他には，合計29回の講演会を行なっているのにもかかわらず，出席しない教員が存在することである。毎回出席をとっているので，今後この実態を明確にし，改善をはかる予定である。

3.2 FDワークショップ

問題点としては，

① かたくなに，このワークショップに参加しない教員が数名存在している
② 2日間で作り上げたプロダクツの，実際の現場での採用の機会が少ない（絵に描いたもちになることがある）
③ 病院の診療実績，講座の研究実績の足枷に捕らえられることがある
④ ワークショップのテーマがマンネリ化する傾向が見られてきた

などであり，2日間の経験が，実際の大学での活動にもっと生かされるようなシステム構築が望まれている。

特に，仕事量が年々増加する中での2日間は，各教員にとって大きな影響を及ぼしているようで，ワークショップで得た価値と2日間の時間がもたらす価値との比較において，FDワークショップを否

定的にとらえる教員も存在するようである。

3.3 学生による授業評価

授業評価におけるもっとも大きな問題点は，少数ではあるが学生の評価に疑問をもち，学生からの意見に耳を傾けない教員が残念ながら存在していることである。このような教員の授業評価は，毎年変化なく低い値を示し，多くの教員の授業評価が上昇するなかで，その差は大きく開いてしまっている。学生も，このような教員の授業に魅力を見いだせず，悪循環に陥っている場合も認められる。

歯学部の授業評価の対象は，教授，准教授，講師までであり，助教の評価は無い。基礎実習など，助教に対する評価も，公正に明確に確立できれば，教員全体のモチベーションは，さらに向上すると考えられる。

授業評価結果の公表方法の工夫や同僚などによる授業評価の必要性などが，今後の要点になるであろう。この点をふまえて，学生による授業評価を引き続き実施する予定である。

3.4 FD 委員会

FD 委員会委員が固定化しつつある。FD 委員会は FD 活動に興味を示し，率先してその活動に携わる教員有志から構成されているが，各教員の仕事の増加に伴い，新しい委員が誕生しにくい環境にある。また，各委員においても，前述のごとく，昇格に伴う仕事の増大は顕著であり，委員会活動へ影響が出る可能性も否定できない。委員の固定は，マンネリ化を引き起こし，維新に対しては消極的になってしまう傾向がある。我々委員会は，そうならないよう意識し活動してはいるが，十分な活動になっているか客観評価は困難である。

以上の問題点に対し，本年度は委員を一部維新し，さらに FD ワークショップに新たに参加したタスクフォースをオブザーバーとして，委員会を開催しており，以前に比較して，活発な討論が徐々にできるようになってきている。

4. 歯学教育における FD の今後

FD は，歴史的に教育の改善（狭義の FD）に始まり，教員のトータル的な資質改善（広義の FD）へと発展してきた概念である。我々歯学研究科・歯学部では，現段階で，カリキュラム・プランニングなどの FD を十分取り入れた教育改善を実行中であり，狭義の FD については，確実に成果が現れてきている。当然のことながら，これに対した問題点も表出してきている。ハード的な面については，FD のみで解決することは困難である。しかし，歯学教育を司る我々教員の資質向上を中心とした広義の FD への取り組みにより，狭義の FD の問題点の多くの部分は対策を講じることが可能となってきている。しかし，実際のところ，すべてが有効に改善されてきているわけではない。この点はないがしろにしないで，確実に結果を出していくべきである。ここで，今後の重要な要素として，どれだけ歯学研究科・歯学部として，すなわち組織として FD を活用していくかであろう。現時点で，FD 講演会，FD ワークショップならびに学生による授業評価に否定的もしくは抵抗を示す教員の存在がひとつの大きな問題点とされている。このような教員をいかに制御して，組織としてさらに上を目指した改革が実行できるかが，歯学研究科・歯学部にとって重要であろう。

文献

北海道大学大学院歯学研究科（2000），『北海道大学大学院歯学研究科第 1 回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2001），『北海道大学大学院歯学研究科第 2 回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2002），『北海道大学大学院歯学研究科第 3 回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2003），『北海道大学大学院歯学研究科第 4 回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2004），『北海道大学大学院歯学研究科第 5 回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2005），『北海道大学大学院歯学研究科第６回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2006），『北海道大学大学院歯学研究科第７回 FD ワークショップ実施報告書』

北海道大学大学院歯学研究科（2007），『北海道大学大学院歯学研究科第８回 FD ワークショップ実施報告書』

吉田重光，川崎貴生，戸塚靖則（2000），「北海道大学歯学部における学部学生教育とファカルティ・ディベロップメント」，『高等教育ジャーナル ―高等教育と生涯学習―』**7**，17-21

飯塚 正，石川 誠，木下憲治，宇野 滋，山本恒之，加我正行，森田 学，佐野英彦，川崎貴生，吉田重光（2002），「本学歯学部における「学生による授業評価」の包括的解析」，『日本歯科医学教育学会雑誌』**18**，64-73

飯塚 正，佐藤嘉晃，根岸 淳，宇野 滋，山本恒之，加我正行，森田 学，吉田重光（2004），「学生による授業評価」の結果に影響を与える評価項目」，『日本歯科医学教育学会雑誌』**19**，415-422

根岸 淳，宇野 滋，飯塚 正，佐藤嘉晃，山本恒之，加我正行，森田 学，吉田重光（2006），「本学歯学部における「学生による臨床実習評価」の解析」，『日本歯科医学教育学会雑誌』**22**，257-263

八若保孝（2006），「第 II 章歯科医学教育の現状と課題 7. 教員の教育能力向上 1）Faculty Development」，『日本歯科医学教育学会 歯科医学教育白書作成委員会（編），日本歯科医学教育学会雑誌別冊 歯科医学教育白書 2005 年度版（2003~2005 年）』，日本歯科医学教育学会（財：口腔保健協会），東京，85-89